

その丸に
あるもの

070

過去見詰め律し続け

「ダルク」とオープンニングスタ
ッフに志願した。

自身も薬物依存症だっ

た。子どものころ、いじめ
の反動で不良グループに。

「不良のくせにシンナーも

やらないのか」。先輩の一
言をきっかけに中学生で薬

物におぼれた。高校の時、

友達に勧められるまま覚醒

剤に手を出した。両親はや
めさせようと何度も病院に
入院させた。「何で病院に
入らないといけないのか。
恥ずかしかった」。入院の
効果はなかった。

二十六歳。二度目の逮捕
で実刑判決を受けた。「二
度と薬はやらない」と思っ
たのもつかの間、刑務所内
の薬物依存者らと薬物の話
をするうちに決意は薄れ

た。「二度とやらないとい
う思いから、二度と捕まら
ない」という思いに変わって
いた」。出所当日、仲間が
開いた薬物パーティーに喜
んで参加した。

二十八歳。ふいに同級生

の出世や結婚の話を知
た。「自分はこのままでい
いのか」。何度も注射器を
トイレで割った。血判を押
して誓いも立てた。しか
し、すぐに薬物に手を出し
てしまった。

皮膚科医の母親の知人

で、ダルクの創始者近藤恒
夫氏との出会いが人生を変
えた。決意を近藤氏に告げ
ると「やめようと思わなく
ていいよ」と思いもよらな
い言葉が返ってきた。心が
軽くなった。それ以来、薬
物を意識することはなくな
った。

ある日、警察から「そち
らの人を逮捕したので迎え
に来てほしい」と電話を受
けた。寮を飛び出した男性

が万引で捕まったことを知
らされた。「行ってやりた
いけど、甘やかしているこ
とになる。自分で気付いて
からしか助けることはでき
ない」。じつとこらえて身
元引受人を断った。

三浦さんは「自分もいつ
薬を始めてもおかしくな
い。自分は『やめ続けてい
る状態』と言う。入寮者
と自らの過去を重ね合わ
せ、自分を律し続けてい
る。チーフディレクターに
なった今、入寮者には自ら
が言われた「やめようと思
わないで」という言葉を贈
っている。

運営は厳しいが、沖縄ダ
ルクの回復率は全国で最も
高いと評価され、地域の行
事にも招かれるようになって
きた。「よくここまでこられ
たもんだ」。今年は沖縄ダ
ルク設立十五周年を迎え、
回復した卒業生で同窓会を
開くことを計画している。

稲福政俊

三浦陽二さん



スタッフと話し合う三浦陽二さん＝2008年12月、
宜野湾市伊佐の沖縄ダルク

発行所 琉球新報社
〒900-3525
住所 那覇市天久905番地
電話 900-8656
郵政 中央郵便局私書箱15号
琉球新報社2009年